

一般演題（口演） | 一般演題（口演）：介護・介護予防/連携医療・地域医療

⌚ 2025年6月29日(日) 10:00 ~ 10:50 血 第2会場（幕張メッセ 国際会議場 105）

介護・介護予防／連携医療・地域医療

座長：寺中 智（あやせほりきり中央歯科口腔機能クリニック）

10:00 ~ 10:10

[O-3-01]

祖父の看取り経験から考える終末期歯科医療のあり方

○高橋 あゆみ¹、杉田 武士^{1,2}、久保田 守¹ (1. 医療法人久保田歯科医院、2. 神奈川歯科大学附属横浜クリニック麻酔科・歯科麻酔科)

10:10 ~ 10:20

[O-3-02]

能勢町における高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施 -行政の歯科衛生士の取り組み-

○福岡 智子^{1,2}、高阪 貴之³、上田 和美^{2,4}、吉本 美枝⁵、小澤 純子⁶、和田 誠大³、池邊 一典³ (1. 大阪府豊能郡能勢町福祉部健康づくり課、2. 大阪府歯科衛生士会、3. 大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座、4. はぐくむ歯科クリニック、5. 京都府歯科衛生士会、6. 大手前短期大学 歯科衛生学科)

10:20 ~ 10:30

[O-3-03]

ビデオカメラと機械学習を用いた嚥下機能評価システムの開発

○山田 愛花¹、森豊 理英子²、肥後 智行²、阿部 大数³、中川 量晴²、稲次 基希³、戸原 玄²、荒船 龍彦⁴ (1. 東京電機大学大学院理工学研究科電子工学専攻、2. 東京科学大学大学院医歯学総合研究科医歯学専攻老化制御学講座摂食嚥下リハビリテーション学分野、3. 東京科学大学医学部付属病院脳神経外科、4. 東京電機大学理工学部理工学科電子情報・生体医工学系)

10:30 ~ 10:40

[O-3-04]

2011年1月～2023年12月の間に当院が歯科訪問診療で施行した食支援について

○斎藤 徹^{1,3}、スクリボ 理絵¹、高橋 耕一²、山崎 裕³、梅安 秀樹¹ (1. 医療法人社団秀和会つがやす歯科医院、2. みなよし歯科、3. 北海道大学大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室)

10:40 ~ 10:50

[O-3-05]

地域コミュニティ「江戸川暮らしの保健室 かなで」における食事会「旬菜亭」の運営と効果について

○平澤 風歌¹、川口 美喜子²、滝本 真弓³、伊藤 真知子³、島田 星羅¹、櫻井 薫¹、小林 健一郎¹ (1. こばやし歯科クリニック、2. 札幌保健医療大学大学院、3. 暮らしの保健室かなで)

一般演題（口演） | 一般演題（口演）：介護・介護予防/連携医療・地域医療

2025年6月29日(日) 10:00～10:50 第2会場（幕張メッセ 国際会議場 105）

介護・介護予防／連携医療・地域医療

座長：寺中 智（あやせほりきり中央歯科口腔機能クリニック）

10:00～10:10

[O-3-01] 祖父の看取り経験から考える終末期歯科医療のあり方

○高橋 あゆみ¹、杉田 武士^{1,2}、久保田 守¹ (1. 医療法人久保田歯科医院、2. 神奈川歯科大学附属横浜クリニック麻酔科・歯科麻酔科)

【緒言・目的】

高齢者の終末期における歯科医療は、口腔機能維持とQOL向上を目的とし、医科における緩和ケアと同様に重要な役割を担う。しかし、身体的・認知機能の低下、通院の困難さなど、様々な課題が存在する。祖父を看取った経験から、終末期歯科医療のあり方について考察をする。

【例報および経過】

症例は96歳男性。心筋梗塞によるバイパス手術以降、心不全症状による身体機能の低下に伴い入退院を繰り返し、介護が必要となった。祖父の負担を考慮し、在宅での介護を選択し、最期を看取る選択をした。祖父の好きな食事や趣味を積極的に取り入れ、家庭での環境改善に取り組み、最期を過ごすことができた。

【考察】

自身の経験を通じ終末期歯科医療では、身体的・金銭的な負担を強いる治療は避け、口腔衛生管理や口腔機能維持に重点を置くべきであると感じた。しかし、個々の状況は多様であり、一律の対応は困難であるため、身体的状態、認知機能などを考慮し、対応することが重要であると考えられた。

歯科医療では、摂食や疼痛など生活に大きく影響する場合には、積極的な治療介入が必要であるが、侵襲の高い治療や通院回数が多くなる治療などは、身体的・精神的な負担となり、QOLの低下を招く恐れもあるので慎重な判断が必要となる。

また、終末期医療では、口腔ケア、緩和ケアなど医療全般を連携し、統合的に行うことを考慮しなければならない。終末期における歯科医療は、まだ十分に確立された領域ではない。今後の課題としては、個々の状況に応じた評価方法、訪問診療の普及、緩和ケアとの連携の強化などが挙げられる。歯科医療従事者は、患者本人の希望を尊重し、周囲と連携しながら、最善のケアを提供していく必要がある。（COI 開示：なし）（倫理審査対象外）

一般演題（口演） | 一般演題（口演）：介護・介護予防/連携医療・地域医療

■ 2025年6月29日(日) 10:00 ~ 10:50 ■ 第2会場（幕張メッセ 国際会議場 105）

介護・介護予防／連携医療・地域医療

座長：寺中 智（あやせほりきり中央歯科口腔機能クリニック）

10:10 ~ 10:20

[O-3-02] 能勢町における高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施 -行政の歯科衛生士の取り組み-

○福岡 智子^{1,2}、高阪 貴之³、上田 和美^{2,4}、吉本 美枝⁵、小澤 純子⁶、和田 誠大³、池邊 一典³ (1. 大阪府豊能郡能勢町福祉部健康づくり課、2. 大阪府歯科衛生士会、3. 大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座、4. はぐくむ歯科クリニック、5. 京都府歯科衛生士会、6. 大手前短期大学 歯科衛生学科)

【目的】

高齢者のオーラルフレイルは、身体的、心理的、社会的の3つのフレイル要素と密接に関連している。したがって、オーラルフレイルの予防はフレイルや要介護状態の抑制において重要な対策である。大阪府豊能郡能勢町では、令和2年度より高齢者の保健事業と介護予防を一体的に実施し、大阪大学大学院医学系研究科および歯学研究科と連携して能勢町健康長寿事業「のせけん」を展開している。令和2年度後期高齢者医療歯科健康診査の結果、能勢町におけるオーラルフレイル基準抽出者の割合は、大阪府平均を4.1ポイント上回っていた。その対策として、能勢町では、令和6年度に任用された歯科衛生士がポピュレーションアプローチとして地域支援介入を実施している。本研究は、能勢町雇用の行政の歯科衛生士が「通いの場」に介入し、歯科保健指導を実施することによるオーラルフレイル予防および介護予防への効果を検証することを目的とした。

【方法】

対象は、令和6年5月から10月に能勢町の「通いの場」46か所に参加した346名(平均年齢76.9歳)とした。歯科衛生士が「通いの場」に出向き、参加者に対して紙芝居によるオーラルフレイルに関する情報提供と口腔体操の解説、口腔周囲筋を効果的に動かす方法の説明を行った。質問紙調査を用いて、歯科衛生士の健康教育の印象や今後の参加意向、口腔体操の行動変容について評価した。

【結果と考察】

歯科衛生士の健康教育の中で印象に残った内容は、紙芝居の内容が最も多く、奥歯の数と転倒リスクについて、口腔衛生が全身に影響する話について、口腔体操の解説の順だった。今後の歯科衛生士の話を聞く機会については、「参加したい」と回答した者が48%と最も多く、「あまり参加したくない」と回答した者は5%であった。自宅で口腔体操をしない者の行動変容についての質問では、準備期の回答が最も多く48%であり、関心期が29%、無関心期が22%であった。今回の調査では、「通いの場」の参加者の多くが口腔と全身の健康が関連していることを理解しており、口腔機能の維持・向上について関心を持ち、健康維持のための知識を得たいと考えていることが明らかになった。行政の歯科衛生士が定期的に「通いの場」に出向き歯科保健指導を行うことは、参加者の健康意識の向上に効果的であると考えられる。

(COI開示：なし)

一般演題（口演） | 一般演題（口演）：介護・介護予防/連携医療・地域医療

2025年6月29日(日) 10:00～10:50 第2会場（幕張メッセ 国際会議場 105）

介護・介護予防／連携医療・地域医療

座長：寺中 智（あやせほりきり中央歯科口腔機能クリニック）

10:20～10:30

[O-3-03] ビデオカメラと機械学習を用いた嚥下機能評価システムの開発

○山田 愛花¹、森豊 理英子²、肥後 智行²、阿部 大数³、中川 量晴²、稲次 基希³、戸原 玄²、荒船 龍彦⁴ (1. 東京電機大学大学院理工学研究科電子工学専攻、2. 東京科学大学大学院医歯学総合研究科医歯学専攻老化制御学講座摂食嚥下リハビリテーション学分野、3. 東京科学大学医学部附属病院脳神経外科、4. 東京電機大学理工学部理工学科電子情報・生体医工学系)

【目的】

嚥下機能の評価手法として行われる嚥下造影検査（VF）は、嚥下に伴う口腔から食道における各器官の詳細な動きを把握できる点に長所がある。しかしVFに必要なX線撮像装置の無い介護施設などの入居者には実施することが困難であり、より簡便で定量的に評価可能な手法が求められている。そこで本研究ではビデオカメラと画像処理を用いた嚥下機能評価システムの開発を行うことを目的とした。

【方法】

患者の喉頭隆起部と肩に10mm×10mmサイズの紙製二次元マーカ（ARマーカ）を貼りつけ、VF検査と同時に患者正面下方部から4K解像度、30コマ/秒でビデオカメラで動画撮影した。両撮影は金属拍子木を用いて撮影後に時間同期を取った。撮影したビデオ映像から1コマごとの静止画を切り出し、機械学習と画像処理を用いてARマーカの画像内の位置座標を抽出した。そして喉頭隆起部のARマーカ座標から喉頭隆起部の移動軌跡を導出した。VF動画から求めた舌骨の挙上開始タイミングを開始点とし、嚥下に伴う動作で喉頭隆起部が最も高くなった位置までの移動量を喉頭挙上量として求め、その後画像のピクセル数から実寸のmmに換算して、喉頭挙上量を半自動で導出するソフトウェアを開発した。開発したソフトウェアを用いて評価実験を行った。被験者は男性5名（80～91歳）、女性1名（81歳）を対象とした。バリウム水4cc嚥下のVF検査から、不顕性誤嚥あり、誤嚥・喉頭侵入なし（健常群）、の2群に分類し、男女それぞれの被験者群ごとにソフトウェアで求めた喉頭挙上量と比較した。

【結果と考察】

男性被験者群では、喉頭挙上量は健常群（5名）が 3.2 ± 2.4 mm、不顕性誤嚥群（1名）が9.1mm、女性被験者群では健常群（1名）1.9mmとなり、健常群に比べ不顕性誤嚥群が顕著に延長する結果となった。その原因として、加齢による舌骨上筋群や下筋群の機能低下に伴い、舌骨や喉頭が下垂し、喉頭挙上量が大きくなったことが考えられる。開発した画像処理ソフトウェアを用いることで、マーカの貼付けとビデオ撮影のみの簡便な操作で喉頭挙上量を導出することで、嚥下機能の評価を行える可能性が示唆された。

(COI開示：なし)

(東京科学大学医学部 倫理審査委員会承認番号 M2023-247)

(本研究は特定臨床研究・治験 非該当)

一般演題（口演） | 一般演題（口演）：介護・介護予防/連携医療・地域医療

歯 2025年6月29日(日) 10:00～10:50 血 第2会場（幕張メッセ 国際会議場 105）

介護・介護予防／連携医療・地域医療

座長：寺中 智（あやせほりきり中央歯科口腔機能クリニック）

10:30～10:40

[O-3-04] 2011年1月～2023年12月の間に当院が歯科訪問診療で施行した食支援について

○斎藤 徹^{1,3}、スクリボ 理絵¹、高橋 耕一²、山崎 裕³、梶安 秀樹¹（1. 医療法人社団秀和会つがやす歯科医院、2. みなよし歯科、3. 北海道大学大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室）

【目的】 わが国では人口の高齢化にともない要介護高齢者が増加しており、当院でも要介護高齢者や有病者に対して歯科訪問診療を積極的に行なっている。近年、摂食機能療法などの食支援の依頼が増加しており、特別養護老人ホームや介護老人保健施設などの介護施設の入所者や居宅療養者に対する食支援も行なっている。本発表ではその概要を報告する。

【方法】 対象は、2011年1月～2023年12月の間に当院が歯科訪問診療で食支援を施行した新患症例1,562例（男性614例、女性948例、平均年齢82.3歳）（再新患を除く）とした。本研究のデータ収集には電子カルテシステムOpt.one（オプテック）などを用いた。

【結果】 同期間に当院が歯科訪問診療を施行した新患症例は9,164例（男性3,562例、女性5,602例、平均年齢82.0歳）であり、食支援を施行した症例は17.0%を占めていた。食支援症例の年齢分布は、80歳代が最も多く640例（41.0%）で、次いで90歳代469例（30.0%）、70歳代259例（16.6%）であった。基礎疾患の内訳は認知症が最も多く951例（60.9%）であり、次いで肺炎807例（51.7%）、脳梗塞551例（35.3%）であった（基礎疾患の重複症例あり）。食支援症例に施行した歯科治療の内訳としては歯周治療が最も多く951例（60.9%）で、次いで義歯調整・修理495例（31.7%）（義歯新製症例を除く）、義歯新製418例（26.8%）、抜歯320例（20.5%）であった（歯科治療の内容の重複症例あり）。

【考察】 当院が歯科訪問診療を施行している要介護高齢者は、摂食嚥下機能の低下を来たす様々な疾患に罹患している場合が多く、また、加齢そのものも摂食嚥下障害の原因になる。高齢化が進行しているわが国では今後益々食支援の需要が高まると考えられる。食支援の体制を充実させるためには、歯科医療機関のみならず、地域の医療・介護施設の関連職種との多職種連携が必須である。当院は今後も関連多職種と連携して要介護高齢者や有病者の食支援を続けていきたいと考えている。

（COI開示：なし）

（北海道大学大学院歯学研究院臨床・疫学研究倫理審査委員会承認番号：2021第3号）

一般演題（口演） | 一般演題（口演）：介護・介護予防/連携医療・地域医療

■ 2025年6月29日(日) 10:00～10:50 ■ 第2会場（幕張メッセ 国際会議場 105）

介護・介護予防／連携医療・地域医療

座長：寺中 智（あやせほりきり中央歯科口腔機能クリニック）

10:40～10:50

[O-3-05] 地域コミュニティ「江戸川暮らしの保健室 かなで」における食事会「旬菜亭」の運営と効果について○平澤 風歌¹、川口 美喜子²、滝本 真弓³、伊藤 真知子³、島田 星羅¹、櫻井 薫¹、小林 健一郎¹ (1. こばやし歯科クリニック、2. 札幌保健医療大学大学院、3. 暮らしの保健室かなで)**【目的】**

民間のボランティアセンターである「江戸川暮らしの保健室」は、2014年1月に地域住民の暮らしの相談場所として開設した。2019年9月から介護保険制度に基づく地域介護予防活動支援事業「通いの場」として地域の高齢者が利用し、また多職種の実習の場として昼食会「旬菜亭(しゅんさいてい)」を始めた。コロナ禍を体験し継続開催している。高齢者の孤立防止と健康な食習慣を支援する「旬菜亭」の運営方法と事業効果を報告する。

【方法】

「旬菜亭」は2019年9月～2024年12月まで67回開催した。コロナ禍は食事会の中止とお弁当に変更した。実施期間の利用者184名。調理担当は、管理栄養士が中心で歯科衛生士、薬剤師とその他に見学と実習に管理栄養士養成施設学生、歯科臨床研修医、薬局管理栄養士が実施した。利用者は食欲、食生活の不安に関するチェックリストCNAQ-Jの「食欲」「満腹感」「空腹感」「味の感じ方」「味の変化」「食事回数」「食事中の体調」「普段の気持ち」8項目を実施した。また、食事会の感想や口腔、栄養の不安や問題を管理栄養士と歯科衛生士に相談した内容を検討した。

【結果と考察】

施設の最大許容利用者数は9名。利用者の最高年齢102歳。利用者183名中、女性162人(88.5%)、男性21人(11.5%)。延べ利用者563名。利用回数1～2回136名、3～5回28名、6～10回6名、11～20回11名、21回以上3名、再来率は42%であった。多職種と見学実習の参加は、利用者の口腔と栄養と食事の連携を実践的に学ぶことができた。食事会は、管理栄養士が献立を作成し、量・バランスを伝える「体にやさしい栄養バランスプレート」に盛り付け食の話題と食意識を深めた。食形態調整が必要な利用者にも対応した。会食時の栄養と歯科に関わる話題提供は、利用者の歯科と栄養の健康相談と受診勧奨となった。CNAQ-Jのチェックから「空腹感を感じない」が多く認められたが、食事回数や満腹感や食欲には影響を及ぼしていない結果であった。栄養と口腔の専門職種が開催する「旬菜亭」の取り組みは、利用者の健康予防と、学生や研修生の実践的な学びの場でもあり、地域のヘルス・コミュニティの場として効果的であると考えられた。今回の報告は、既存の非識別加工情報のため倫理審査は未受審の研究である。(COI開示：なし)(倫理審査対象外)